

房総の

文化財

Vol. 56



ISSN 0919-0848
Bosō.no/bunkazai

平成29年3月13日 公益財団法人 千葉県教育振興財団

〒284-0003 千葉県四街道市鹿渡809-2

TEL 043-422-8811(代) FAX 043-424-8850

http://www.echiba.org/bunkazai_top.html



contents

遺跡の紹介

- ◆ 柏市小山台遺跡
- ◆ 酒々井町飯積原山遺跡

遺跡見学会報告

- ◆ 柏市小山台遺跡

柏市小山台遺跡
大型竪穴住居跡発掘風景

発掘調査の紹介

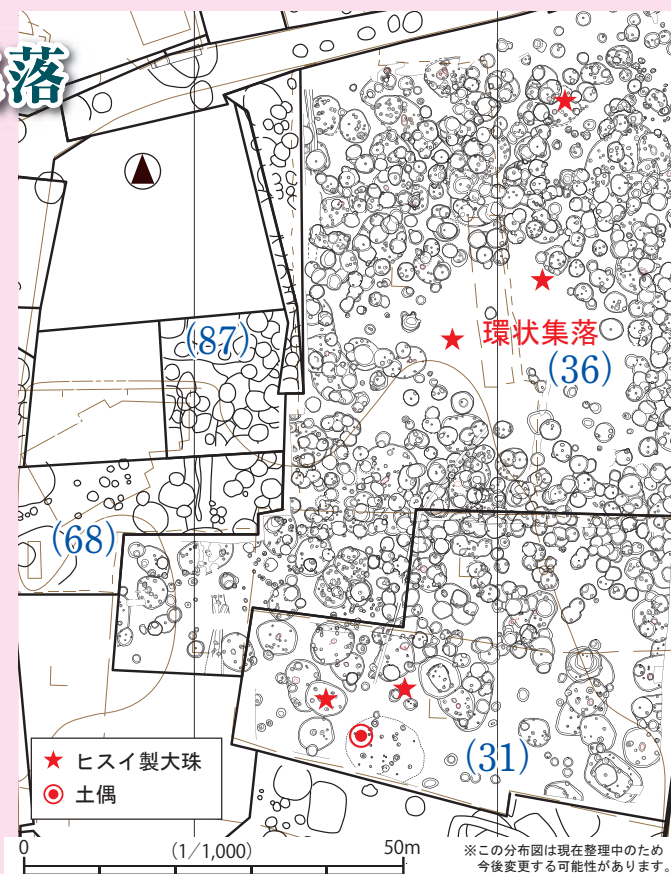
環状に広がる縄文時代の集落

柏市小山台遺跡

柏市北部を走るつくばエクスプレスの柏たなか駅周辺では、柏北部東地区土地区画整理事業に伴って多くの遺跡が調査され、縄文時代を中心とした大規模な集落が確認されています。

その中で最も注目されるのが、柏市小山台遺跡です。全体面積245,000㎡の大規模な遺跡で、平成11年度から継続的に調査され、現在ほぼ終了に近づいています。これまでの調査の結果、縄文時代中期中葉～後葉(約4,500年前～4,000年前)の大きな環状集落が見つかりました。

この時期の環状集落は、中央に広場と思われる空間が位置し、広場の周りにはドングリ類などを保管した貯蔵穴、その外側には竪穴住居群が密集して営まれる環状の広がりとなっています。右図の(36)地点が環状集落の中心部分で、周囲の遺構群を含めると外径100mほどの大きさになります。



▲環状集落の遺構分布状況

小山台遺跡(78)

この地点は、平成27年10月～12月まで、1,036㎡を対象に調査されました。環状集落の中心から100mほど南側に離れた場所に位置しています。この地点から、長さ11m、幅6mほどの長方形の大きな竪穴住居跡が発見されました。内側に一段低い床面を作り出していることから、「有段竪穴遺構(住居)」と呼ばれています。柱穴は内側の床面の隅に4本、長辺の壁の中央部に3本ずつ掘り込まれています。なお、床面には炉がありませんでした。

このような「有段竪穴遺構」は、千葉県では阿玉台Ⅲ式～加曽利EI式前半の時期に限って作られました。平面形は、阿玉台Ⅲ式・Ⅳ式段階が、長方形が多いのに対し、後続する加曽利EI式段階は正方形に近いものが多いです。



▲長方形の「有段竪穴遺構」(SI001)

阿玉台Ⅲ式土器

この縄文土器は、SI001の柱穴底面からほぼ完形で発見されました。高さ15cm、口径13cmほどの小形の深鉢形土器で、この時期の特徴である雲母片が胎土中に多く含まれています。口縁部に突起が付けられ、口縁部から曲線状にのびる隆帯に沿って、また、隆帯間にも押し引きの文様がみられます。

SI001有段竪穴遺構の柱穴内出土土器▶



▲柱穴内の縄文土器出土状況

ほぼ完形の土器が隅の柱穴の底に置かれていました。出土状況から、有段竪穴遺構が廃絶され、柱が抜き取られた直後に棄てられた可能性が高く、この遺構が使われていた時期を示す手がかりとなります。

小山台遺跡

BC(紀元前)

旧石器時代

縄文時代

弥生

約30,000年前

約12,000年前

約2,300年前

小山台遺跡(36)



▲(36)地点の重なり合った遺構群

ヒスイ製の大珠

縄文時代中期を代表する装身具です。日本列島内では、富山県と新潟県の県境を流れる新潟県糸魚川市姫川の上流で産出する良質のヒスイが知られており、大珠はほぼこの地域で独占的に製作され、全国的に流通したと考えられています。

大規模な集落でも出土点数はきわめて限られており、本遺跡で7点もの権威の象徴である大珠が見つかったことは、複数のリーダーが当地に存在していたことを示しています。

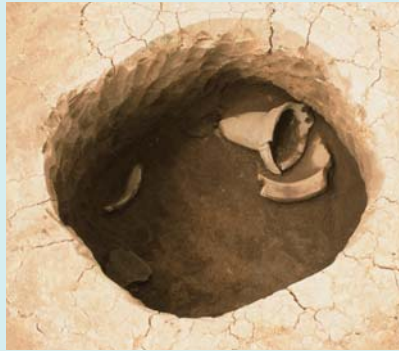
小山台遺跡出土のヒスイ製大珠▶
(カッコ内は出土地点番号)



▲SK119縄文土器出土状況

関東西部や甲信地方で盛んに作られた勝坂式土器の文様が取り入れられています。ただ、土器の製作地は地元と考えられます。

勝坂式系統の縄文土器▶



▲SK136縄文土器出土状況



◀大木式系統の縄文土器 (SK136)

口縁部にみられる3単位の大木型横S字文は、福島県の大木式土器の系統とされていますが、在地の阿玉皿式の要素もみられます。



◀勝坂式と七郎内II群の折衷土器 (SK136)

勝坂式の系統である隆帯による三つ指文と、福島県の七郎内II群土器の系統である隆帯に沿った渦巻文を伴う押引文があり、両地域の折衷土器と思われます。

小山台遺跡(31)



▲SI016竪穴住居跡周辺の遺構の重なり



▲SI016竪穴住居跡縄文土器出土状況

(31)地点は、(36)地点の南側に隣接する調査区で、環状集落の南側にあたります。平成22年8月～平成23年2月まで、2,396㎡を対象に調査が行われました。その結果、縄文時代中期の竪穴住居跡30軒や小竪穴105基など数多くの遺構が集中して見つかりました。

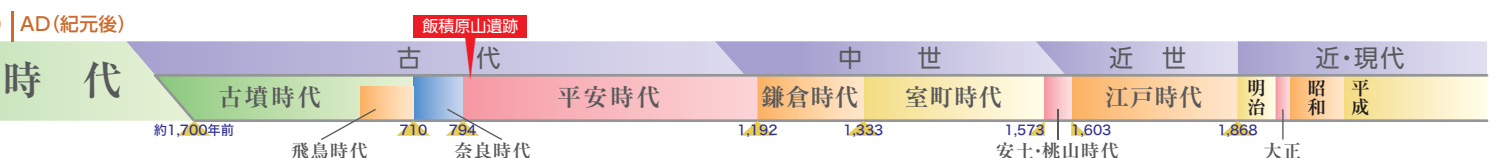


▲土偶(正面)



▲土偶(右側面)

右手と右足を欠いていますが、頭部と手足を三角形に作り出し、目と鼻は刺突によって表現しています。県内での中期の土偶の例は多くありませんが、形状は、縄文時代中期後葉(約4,000年前)に関東西部で盛んに作られた土偶と似ています。



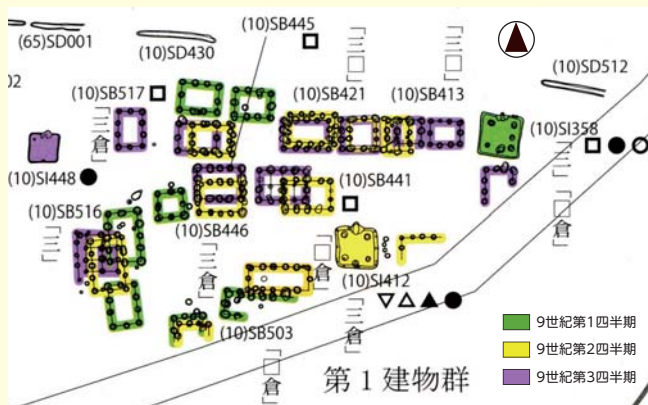
荘園のはじまりの頃

いづみはらやま

酒々井町飯積原山遺跡



▲飯積原山遺跡第1建物群全景(南から)



第1建物群(庄所)全体図(上が北)

酒々井プレミアム・アウトレット近くの酒々井南部地区土地区画整理事業に伴って、約40,000㎡を対象に平成7年～平成26年まで断続的に発掘調査が行われました。

縄文時代を中心とした遺跡ですが、遺跡北東側の谷津に面した台地縁辺部から、規則的に配置された掘立柱建物群が3か所まとまって確認されました。

古墳時代は閑散とした景観であった台地の一角に、8世紀後葉～9世紀中葉にかけての比較的短期間に竪穴住居跡77軒、掘立柱建物跡47棟、区画溝7条などが突如として姿を現しました。「庄」や「三倉」などの墨書土器が出土したことなどから、この時期の飯積原山遺跡は初期荘園としての機能を果たしていたのではないかと考えられています。

左の写真・図は荘園の中心施設である「庄所」と思われ、他に「寺院域」及び「居宅域」で構成されています。

「奈野」の墨書土器は、本遺跡の北を流れる高崎川の対岸に位置する二彩椀や三彩陶枕などが出土した拠点集落と位置づけられる酒々井町尾上木見津・富里市駒詰遺跡で多量に出土しており、この遺跡との関係も注目されます。



「奈野」



「庄」



「三倉」

※ 木原 高弘 2016「酒々井町飯積原山遺跡における初期荘園について」『研究連絡誌』第77号 当財団刊行に論文掲載

遺跡見学会報告

柏市小山台遺跡

当財団の普及事業として実施している遺跡見学会は、平成11年度から長期にわたって発掘調査が行われ、ほぼ終了の時期を迎えることとなった柏市小山台遺跡を会場に、平成28年10月30日(日)に開催しました。

調査中の(96)地点の現地見学の他、環状集落の中心となる(36)地点から出土した縄文時代中期の土器21点や7点のヒスイ製大珠、土偶などを展示し、小山台遺跡の環状集落のあり方などを紹介しました。

当日は曇り空で、10月にしては寒い中にもかかわらず、近隣住民を主体に、県外からの見学者も含め、総勢153名の参加がありました。



▲(96)地点の現地説明のようす



▲(96)地点の現地全体



▲遺物展示コーナーの解説風景▲

